

---

# 竜の英雄

糸冬始

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜の英雄

### 【Nコード】

N6837Z

### 【作者名】

糸冬始

### 【あらすじ】

長い寿命と蓄えた英知、強大な魔力と頑強な身体を持つ生き物、竜。あるとき、オステイリア皇国の第四皇子が竜を倒す者、竜の英雄として旅立つこととなった。

同国、後日。人里離れた森で、一人の青年が行き倒れた少年を見つける。風の噂に聞く第四皇子に良く似た少年と、竜の卵を盗んだお尋ね者に良く似た青年。追われたり隠れたり戦ったり、訳ありの二人の珍道中。

## 00：とある森の出来事

竜。

世界に古くからある強大な生き物。

長い寿命と蓄えた英知、強大な魔力と頑強な身体を持ち、人が住む事のできない峡谷に巢食うという。まれに人里に現れては家畜を襲い、金銀財宝を奪って蓄えるとも。若い娘の血肉が何よりの好物で、浚って食べるとも。

人間には到底敵わない、世界の絶対強者。

しかし竜の鱗は鋼よりも硬くしなやかで、その血肉は不老不死の妙薬だという。そのため、どれほどの犠牲を払ってでも手に入れようとする者も多い。角の先から尾の終わりまで、残さず利用価値があるのだ。

また、竜を欲しがる者も居れば、竜を倒すことそのものを目的とする者も居る。腕に覚えのある者は皆、絶対的強者である竜を屠り人々の英雄となる夢を見る。小さな竜を倒しただけでも、一生遊んで暮らせる褒賞と多くの人からの羨望が得られるのだ。

竜を倒した偉大な者。

人々はその者を、畏敬の念を持ってこう呼ぶ。

竜の英雄、と。

\*\*\*

「くそつ、あんの馬鹿兄どもめええ……」

恨み辛みのこもった言葉が、深夜人氣のない森の片隅で呟かれた。そのまま声の持ち主が息絶えたらさぞ見事な怨霊になるだろう、と思わせるような怒氣の入りようだ。もっとも、その想像はすぐに実

現しそうな状況だったが。

年のころは十五、六。幼さの残る顔立ちは、いまだ少年と呼び表しても通じるであろう。明るい茶色の髪は薄汚れて輝きを失い、白い肌も汚れてくすんでいる。元は高級であろう衣服も汗や泥に塗れて、もはや貧民街の孤児に紛れても違和感を感じさせない身なりとなっていた。

そして脇腹には、刺されたような傷跡。じわじわと鮮やかな赤が広がり、もとより白い肌が蒼白になっていく。あと十数分もすれば事切れるか、獣に嗅ぎ付けられてメインディッシュとなるかだろう。どこをとつても、そう遠くない未来に怨霊と化すと思わせる。

「死ん、で…… たまるか……っ」

ただ一つ、ぎらぎらと輝く青い目を除いては。

澄んだ蒼穹がガラス玉に収められたような、目を惹きつける青色。それは、とても死に逝く者の目とは思えぬ輝きを放っていた。

死んでたまるか。

再び少年の唇が動いたが、先ほどの言葉よりもずっと微かに吐き出された。出血の所為で意識もおぼつかないのだろう、視線も定まらない。が、それでもぎらぎらとした輝きは消えず、いつそ不気味なほどの生への執着だった。

暗闇の中、木々のざわめきと少年の息の音だけが静寂を妨げる。ぼろきれの様な薄汚れたクロークに包まれ、少年はただ息をしていた。

と、息が乱れた。風が枝を揺らすものとは違う、もっと質量を持ったものの音が聞こえてきたのだ。

がさがさ。下草をかき分ける音が近づいてきていた。獣か、夜盗か。どちらにしろ、人里離れた森で行き倒れた時点で、こうなることは予測していた。ただ認めたくなかった。

近づいてくる音は、獣にしてはやや大きい。では夜盗か。慰み者にはなりたくないが、とだけ思い、少年の意識は急速に闇に落ちていった。

闇に落ちる中で、歌うような口笛が聞こえた気がした。

## 00:とある森の出来事（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想・批評、誤字・脱字報告、うけつけています。よろしく願  
いします。

## 01：押し売りの取引

ぼんやりとまどろむ闇の中で、少年の意識は緩やかに覚醒した。誰かが自分の怪我の看病をしていた、ような。そんな都合の良い夢をいつまでも見てられないと思い、少年は目を覚ました。

「……つて、あ？」

知らない天井に、少年は間抜けな声を上げた。てっきり奴隷にされてどこかに捕まっているか、あの世で目を覚ますと思ったのだが、咄嗟に自分の身体を確かめるが、拘束具の類はないようだ。どころか丁寧に手当てされている。

「あれ……夢じゃなかったのか」

助けられたような、記憶はある。が、余りにも都合の良いことだったため夢だと思った。見るからに怪しい自分を助ける酔狂な者がいるとは。第一、あんな人里から遠く離れた森の中で深夜に人が通りかかるなんて。

運が良かったのか、それとも何か裏があるのか。

「……ちっ」

裏がある、と咄嗟に判断したのは、今までの生活の賜物か。自分の思考回路が嫌になるが、そうでもしないと生き残れなかったのも事実だ。状況が怪しすぎるのもある。あんなところで倒れていた自分が言うのもなんだが、この状況はおかしいのだから。

ちら、と視線を走らせ状況を確かめる。質素なベッドに布団、机と椅子が一つずつ、棚は小さなものが二つ、簡素なキッチンとその奥に窓が一つ。部屋が一つしかない山小屋か何か、といったところか。小屋自体も含め、どれもこれも手の入ったあとがある。素人の補修なのだろう、机が若干傾いている。

「一人暮らし、か……？ 生活感のない家だな」

窓の外には木々が見え、口笛のような鳴き声が聞こえる。あの森の中でときおり耳にした音だ。小鳥か何かだろう、とあてをつけ、

考える。どうやら街に運ばれたわけではなく、まだ森の中のような。  
武器になるものは手元になく、手当てされているとはいえ重傷。  
少年は嘆息し天井を見上げた。

「なるようになれ、だな。どうにもできねー」

「気がついたばかりなのに、随分おしゃべりだね」

「っ！」

声の方に視線をやる。と、クロークを羽織った青年が小屋に入ってきていた。手に抱えた袋から薬草がはみ出している。フードの下  
の顔はどこか見覚えのあるような平凡な顔立ちだ。焦げ茶の髪に、  
若葉のような緑の目。農村で働いていそうな外見は、この状況にあ  
まりにもそぐわない。

青年はくすくす、と人のよさそうな笑みを浮かべて少年を見た。

「うん、怪我は大丈夫そうだね。一応、包帯を替えたほうが良いか  
な」

「……あんた、誰？」

「話は怪我を診ながらできるだろう？ 脱がすよ」

青年は躊躇うことなく少年の服をはいでいく。普通、同性とはい  
え躊躇するものだと思うが。手当てされた跡もあるので今更か、と  
思い直してされるがままになる。

赤黒く染まった包帯が取り替えられていくのを眺めながら、青年  
に質問を投げかける。

「で、あんた誰？」

「名前はティル。森で行き倒れていた君を運んで手当てした。こん  
なところで良い？」

「……一人暮らし？」

「ご想像にお任せするよ」

「医者なのか？ 手馴れてるみたいだけど」

「まあ、医者 of 真似事は良くやっているからね。薬草を売って生計  
を立ててる。あ、薬塗るから、ちよっと沁みるよ」

「い……っ！」



脇腹に走る刺激に、思わず悲鳴を漏らす。テイルは変わらず笑みを浮かべたまま手当てを続ける。どうやら、痛みを氣遣う心は持ち合わせていないようだ。柔和な笑みを浮かべるくせに、行動に人のことを考えている感じがしない。

包帯を巻きなおしたところで、テイルは椅子をベッドに寄せてさて、と口を開いた。

「それじゃ、そろそろ名前を聞いても良い？」

「あ？ あー……」

もしかして、探っていたのか。手当てをさせるかどうかで、警戒の度合いを確かめていた。人のことを考えている様子は見られないのに、妙なところで間合いを計っているような。

「えっと、俺はジーク。……助けてくれて、ありがとう」

「どういたしまして。怪我が治るまではゆっくりしていきなよ」

「いいのか？」

ジークの言葉に、テイルはきょとんと瞬いた。年上だと思われるが、妙に仕草が子供っぽい。言葉が足りなかったか、とジークは改めて言い直した。

「いや、だから……こんな怪しい人間、家においとしても良いのかってこと」

「自分でそういうこと言う？」

「自覚してるから言ってるんじゃないか。どうなんだ？」

テイルは悩むように視線をさまよわせ、しばしして口を開いた。

「君を助けたのにはいくつか理由があるんだ。まず第一に、おれは昔行き倒れたところを助けられて一命をとりとめたことがある。だから他人事には思えなくてね、行き倒れは助けることにしてるんだ」

「へえ……」

妙に親切なのは、自分が親切にされた経験があるから。理由として強くないが、しかし納得の出来る理屈は通っている。ほかしてはいるが、嘘という感じはしない。

「それじゃ、第二の理由は何だ？」

「君の顔。……ああ、安心して、衆道つてわけじゃないから」  
思い切り引いたジークに、ティルが付け加えるように言う。慰み者にする気で助けたのか、とジークの想像が嫌な方に進んだのだ。尤も、ティルの言い方が悪いのだが。

ティルはじつくりとジークを眺め、再び口を開いた。

「日に透かすと金にも見える茶髪、澄んだ空のような青い目。年は数えで16歳、でももう少し幼く見える。薄汚れてはいたものものとても質の良い身なりをしていた。……何かを、思い出すよね」

ティルの言葉を黙って聞き、ジークは冷静に見えますようにと祈った。動揺を悟られてはいけない。それは肯定だ。

ジークの青い目を見つめ、ティルはにつこりと笑っていった。

「行方不明の竜の英雄、第四皇子のジークヴァルト様によく似ていないかい？」

一難去つて又一難、とジークは嘆息した。動揺を隠し、にへ、と笑う。

「……あー、うん、よく言われる。そっくりだろ？」

「そうだねえ。尋ね人の掲示の情報とそっくりだ。実物は知らないけど。ちなみにいくつ？」

「16歳。いやあ奇遇だなー」

「うんうん、凄じ偶然もあるものだねー」

薄ら寒い会話だった。窓の外から聞こえる口笛のような音が朗らかにさえずっているが、空気は変わらず寒々しい。

ジークは横になったまま、ティルを見上げた。にこにことした柔和な笑みに変化はないが、先ほどよりもずっと恐ろしく感じる。

「俺を衛兵に突き出してみろ？ 褒賞もらえるかもな」

「いやあ、間違っていたら君に迷惑だし、怒られちゃうかもしれないじゃない？ 証拠もないしなあ」

「そりゃ正論」

正論過ぎて胡散くさ過ぎる。ジークは内心で呟いてティルの様子を窺うが、相変わらぬ笑顔。ジークが寝ているうちに衛兵に突き

出さなかったということは、何か考えがあるのだろうか。

「なるほどね。じゃあ第三の理由は何なんだ？」

「あれ、まだあるって言ったっけ？」

「理由が二つしかないんだったら、『いくつかある』なんて言い方しねえだろ」

ジークの言葉に、テイルは目を大きく見開いて頷いた。やはりどこか抜けている感じがする。

「えっとね、なんていえば良いかな……おれに常識を教えて欲しいんだ」

「はあ？」

「おれ、凄く世間知らずで。ずっと田舎で育ったからよく分からないことも多いし。でも、ちょっと旅に出ようと思ってさ、だから一般常識くらい身につけないとって思ってる」

「……それで、俺を助けた？」

「うん、まあ、恩を売ろうと思って？」

納得のいく言葉だった。少なくとも、怪しい人間を助けた人の発言ということを鑑みれば、十分に信用に足る言葉だろう。ただの好意としてではなく利益を考えての行動だったのならなおさら。

テイルの言葉を聞き終わり、ジークはため息をついた。

「つか、もう手当てとかしてるし……押し売りじゃねーか」

「ダメだったら、これからの活動資金として君を衛兵のところに連れて行くつもり」

「押し売りどころか脅しじゃねーか！」

おおい、と思わず突っ込む。頭が痛い気がするが、怪我の所為だけではないだろう。テイルに手を差し出すと、ジークの手を見つめて困惑をあらわにした。本当に、常識がないようだ。ジークはひざの上に載せられていたテイルの手を取り、ぎゅっと力を込めた。

「まあ、なんだ。これからしばらく、よろしく」

「……うん、取引成立だ」

ジークはテイルの気の抜けた笑みに笑い返し、これからの未来へ

の憂いを捨てた。

なるようになれ。それだけだ。

## 01：押し売りの取引（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想・批評、誤字・脱字報告、うけつけています。よろしく願  
いします。

## 02：世間知らずへの常識授業

ティルに拾われ取引という名の脅しに屈して一ヶ月。ジークはティルの常識のなさに度肝を抜かれていた。

最初に気がついたのは、文字だ。何やらくねくねした模様が板に描いてある、と思ったら100年前に貴族が使っていた古代文字だった。ジークはすらすらと読むことは出来なくとも、それが何かくらいまでは分かる。慌ててティルを問い詰めたところ、

「え、それ今使ってる文字じゃなかったの？ 道理で見かけないと思った」

と力の抜ける答えが返ってきた。

更には、出てきた貨幣が今はもう滅びた国の金貨であつたり、地名や国名の古い言い方しか知らなかったり、ジークの持っていた最近の知識や道具にいちいち驚いたり。

ようするに、知識が全体的に古いのだ。ざつと50年から100年ほどは。

「ティル、お前一体何者なんだよ……これもはや世間知らずとか言う問題じゃねえよ」

「そう？ まあ、だからこうして勉強しているわけだけど」

ジークの言葉に首をかしげながら、ティルは手元の黒い板に白墨で書きとめていたことを見下ろした。紙やインクは高価だから、勉強でのメモなどは小さな板に書くのが普通だ。白い粉を払って掃除すれば何度でも使えるため、子供の書き取りによく使われる。

ティルの常識のなさに不安になったため、急遽ジークが授業という形で教えることになったのだ。分からないことがあつたらその都度、訊けばいいだろう、というティルの意見は素早く却下された。その程度でなんとかなる問題ではなかったのだ。

「えっと、ティル。次は何について知りたいんだっけ？」

「街で自活するためにはどうすればいいか、で……そうそう、お金

についてだ」

「ああ、お前の貨幣に対する知識は150年前で止まってるんだっ  
たな……」

ジークはため息をつき、持っている貨幣を机の上に並べた。

「貨幣は偽造が出来ないように、国ごとに特殊な加工を行って責任  
もって製造している。このオステイリア皇国でつかっているのは銅  
貨、銅貨、銀貨、金貨で、単位はオスト。外国に行けば単位は変わ  
るが、おおよその四種類だ。流石に金貨と銀貨は持ち歩いてない  
からな、とりあえず実物は銅貨と銅貨な」

「金貨と銀貨は使わないのかい？」

ティルの素朴ともいえる疑問に、ジークはため息をついた。

「金貨は大きな街の領主が使うような金額が動くとき、銀貨は栄え  
た商人が金を動かすときに使う貨幣だ。平民が日常的に持つ金額じ  
やねえよ。同じように言うなら銅貨は一般的な平民が売買で使う金  
額で、銅は端数だな」

つまりは、貨幣とは身分の現われなのである。金貨は貴族、銀貨  
は商人、銅貨や銅貨は平民。辺境の地であれば銀貨すら見たことが  
ない人も珍しくはないし、田舎であれば貨幣を使わない物々交換が  
まだ流通している。

というか実際、ティルは今まで物々交換で生計を立てていたため、  
貨幣の違いすら知らなかったのだが。しかしドのつく田舎であれば  
そういった人間もいるのだろう。

ジークの持っていた大きさが違う数種類の銅貨と銅貨を見て、テ  
イルは首をかしげた。

「この、銅貨も銅貨も大きさが三種類あるけど、どう違うんだい？」  
「銅貨は一番小さいのから順に1オルト銅貨、10オルト銅貨、2  
5オルト銅貨。銅貨は一番下が100オルトで、同じ比率で上がっ  
てく。まあ、端数なんて纏め買いとかなるとまけてくれたりするけ  
どな」

「生活の知恵をありがとう。それで、どれくらいの価値なんだい」

「ティルの価値観が良くわかんねえから迂闊なことはいえないが……そうだな、ティルの暮らしぶりだと、一日三食で1000オルトつてところか」

「ふうん……」

こりこり、と白墨の削れる音が沈黙に落ちる。ティルの書き取りは全て古代文字のため、板がどこぞの遺跡の出土品ようになっているのがおかしかった。ジークはにやつきながら貨幣をしまい、授業を続ける。

「で、本題だな。金を稼ぐ方法について」

「うんうん」

「ティルは旅を続けながら金を稼ぎたい、んだよな？ それなら英雄組合を利用するのが手っ取り早い」

「英雄……組合？」

二つの言葉のアンバランスさに、ティルは微妙な顔をした。ジークもその気持ちは分かるので、強く頷く。

「正確には”竜の英雄候補者組合”。国に正式に認められていなくても力を持った人間はいるだろ？ そういった人に下位竜や野獣退治の依頼をしたりできる幹旋所。そこで名を上げると国の偉い人の目に留まって、たまに”竜の英雄”が生まれる。だから”竜の英雄候補者組合”なんだ。組合加入者は基本的に候補者って呼ばれてるな」

「ふうん、英雄、ね……」

英雄という言葉に、ティルの笑みが苦々しいものになった。何か嫌な思い出でもあるのか、とも思うが、組合の人間には荒くれ者も多い。自称英雄の狼藉は田舎にもあるのだろう。

ジークも自称英雄には痛い目を見たことが何度かある。何せ自称するだけあって実力がある者も多いのだ。ジーク自身は組合に加入しているものの貧弱な部類であり、言い返そうにも返しにくい。子供じみた外見と相まって散々にからかわれたのは苦い思い出だ。

そんな苦い思い出を振り返りつつ、ジークは浮かない表情のティ



ルに話しかけた。

「まあ英雄組合って言っても退治の依頼ばかりじゃない。薬草の採取依頼とか、街中での手伝いとかもある。何でも屋みたいなもんだ」  
「そう。薬草なら今でもやってるし、なんとかなりそうかも」

ふむ、とテイルは壁に吊るして乾燥させている薬草を見上げた。  
全くいつも通り、ではないものの、先ほどまでの陰鬱とした影はない。ジークは内心で安堵の息をつき、話を続けた。

「加入のやり方は、またそのときに教えるよ。候補者である俺が保証人になるから、入会費も安くすむだろうし」

「ありがたいよ。ジークを助けて本当に良かった」

「この程度の常識でありがたみが増す俺の命って一体……」

テイルの言葉に、ジークはそつと脇腹を撫でた。一ヶ月もたてば、だいぶ怪我は塞がり回復している。が、どうも治りが早すぎる気もするのだ。早く治る分に不都合はないのだが、テイルの調合した薬の性能の高さに驚きが勝る。街で売れば価格の高騰は間違いないだろう。

不思議なのは、その材料や調合法をどうやって手に入れたのかだ。良い薬を作るには当然貴重な材料を必要とするはずだが、この小屋でそんなものは見たことがない。調合法についても、ここまで世間ずれしたテイルが誰かに師事していたとは到底思えない。

ちくはぐしている。それがジークの感想だった。

大体、いくら田舎で育ったとはいえ知識が古すぎる。30年かそこらであれば、山間部の村などで生まれ育てばズレが起きることはある。しかしテイルの場合は知識のズレが100年を超えるのだ。いくらなんでもおかしい。

のんびりとした喋り方の、柔和な笑顔の青年。ジークを助けた命の恩人。成り行きに流されて協力しているが、テイルが怪しいのは事実だ。

100年前の知識。古代王朝の金貨。材料も調合法も分からない薬。一体、どんな半生を送ってきたのだろうか。

「……はあ」

ジークはこつそりとため息をつき、テイルを窺った。が、相変わらず複雑怪奇な古代文字で真剣に書き取りをしている。いい加減、文字も覚えさせなければいけない。覚えるべき常識は山のようにある。

非常識だ。しかしそんな非常識に救われてジークは命を繋いだわけであつて。ジークはもう一度ため息をつき、テイルに向き直った。常識についての授業は、まだまだ足りないようだ。

## 02：世間知らずへの常識授業（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想・批評、誤字・脱字報告、うけつけています。よろしく願  
いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6837z/>

---

竜の英雄

2011年12月27日22時54分発行